

東国文化について

～私を魅了した三人童女～

伊勢崎市立あすま北小学校

6年 根岸 希衣

1. 調べた理由・きっかけ

私は、4年生の時、埴輪に興味を持ちそれ以降家族とよく古墳めぐりをしています。埴輪の本を買ってもらい、たくさん読んでいて、中でも三人童女がひと目見て忘れられなくなりました。好きになったというか、何だか不思議だったからです。三人童女を見て、たくさんの疑問ができました。頭の形は何か、背中の丸い物は何か、手の形は何かなどです。

今回は、三人童女について自分の中の疑問を解決しようと思い、このテーマにしました。

2. 研究方法

(1) 三人童女が出土された観音山古墳について調べる。

(2) 三人童女の疑問に思ったことを調べる。

- ① 頭の形は何か
- ② 背中の丸い物は何か
- ③ 手の形は何か

(3) (2)の結果をもとに自分で実際に作ってみる。

→ この時代に音を出していた、げんの楽器をイメージして三人童女を実際に作る。

3. 結果

(2-(1)) 三人童女が出土された観音山古墳について調べる。



綿貫観音山古墳

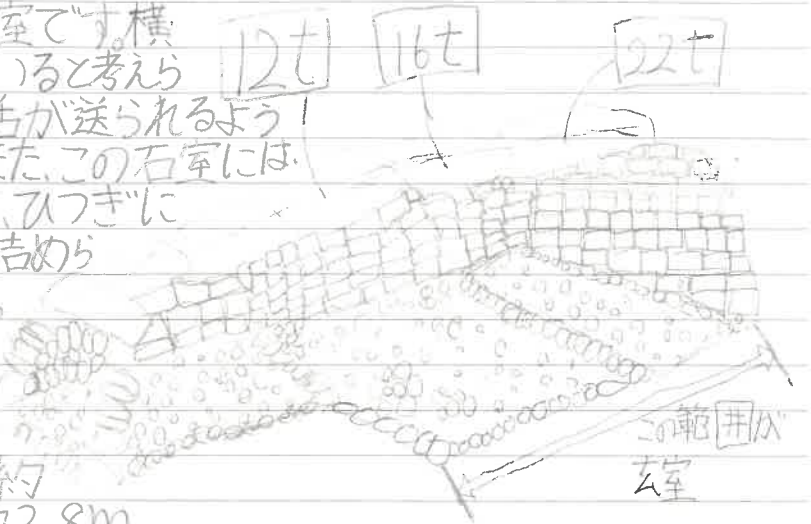
観音山古墳は、4基(菅賢寺裏古墳・不動山古墳・若鼻二子山古墳(消滅)・綿貫観音山古墳)からなる綿貫古墳群の中にあります。観音山古墳はこの4基の中でも最後に造られた、6世紀後半の前方後円墳です。観音山古墳の墳丘長は、97mもあります。前方部幅は63.1m、後円部の直径は、61mもあり、前方部や後円部の高さは、9mをこえる高さです。これは、3階建ての家の高さに相当します。

この時代に、大型の前方後円墳を造ることは、ヤマト王権の許可がないと造ることができないことから、ヤマト王権と関わりがあったことが分かります。～|～

〈石室の様子〉

観音山古墳の石室は横穴式石室です。横穴式石室は、黄泉の国へつながっていると考えられ、死後の世界でも豪族らしい生活が送られるように副葬品がおさめられていました。また、この石室には、ひつぎがなかったのです。被葬者は、ひつぎに入れられずに川原石が一面にしき詰められた場所で安置されていました。ひつぎに入れなかった理由として、復活した時に、出られやすいという考え方もあるそうです。

観音山古墳の石室は奥まで「約12.6m、玄室の長さは約8.2m、幅約3.8m、高さ2.3mです。玄室の面積は、国内最大級です。石室の天井石は、奥から、22t、16t、12tでいかたで、川を渡って、運ばれてきたそうです。観音山古墳の石室は、奇跡的に天井の石がくずれて落ちて、盗掘をまぬがれました。



〈副葬品について〉

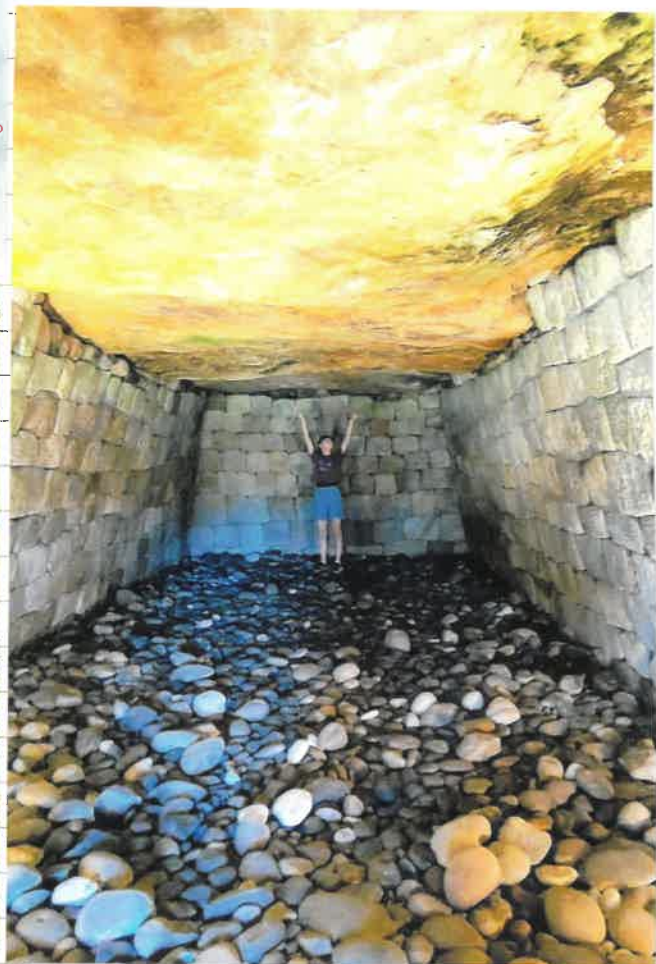


観音山古墳から出土した副葬品は、銅鏡・金属製容器・装身具・武器・武具・馬具・土器などたくさんの種類の物が出土しました。中には、北齊や百濟・加耶・新羅といった現在の中玉や朝鮮半島の東アジアの国々との交流を示すものがあります。それらから観音山古墳の被葬者は当時の日本の外交政策に積極的に関わっていたと考えられ、その中で、これらの品々を手に入れたと考えられることができます。

中でも、貴重な物を3つ紹介します。
 一つ目は、銅水びょう(写真中①)です。銅水びょうは糸田い首首と卵形の胴部が特徴的な水びょうです。中国の北齊の貴族で562年に亡くなった人の墓、庫狄回洛墓から出土した銅水びょうとこの銅水びょうは、よく似ています。また、法隆寺宝物にとても良く似た水びょうがあります。
 二つ目は、獣帯鏡(写真中②)です。これは、れい獣や神仙の文様がある鏡です。また、百済の武寧王陵から出土したものと同型鏡であると判明されています。
 三つ目は、金銅鈴付大帯(写真中③)です。金銅鈴付大帯は、201個の金銅鈴が付いた大帯です。日本では、同じような大帯が出土していますが、鈴が付いているものは、これだけあります。



← 観音山古墳の被葬者が外交政策に積極的に関わっていたことを表した図。

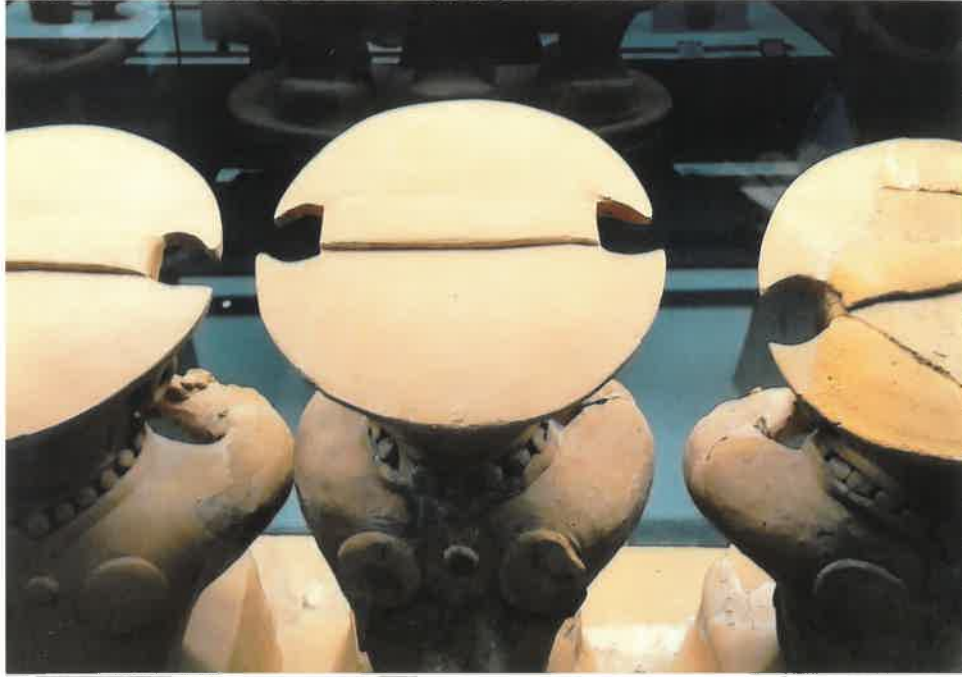


↑ 石室の入り口です！
 入ってみると....

↑ こんなにも高さが高く、とても広かったです。

(2-(2))三人童女の疑問に思ったことを調べる。

①頭の形は何かということについて



三人童女の頭は、古墳島田といつかみ型を表しています。古墳島田は、かざりくしやたてくしをさしたり、ひもでかざったりして、はなやかなかみ型にしていました。しかし、埴輪などは高貴な人の行事の日の様子を表しているの、普段は、かざりが少なく、生活の邪魔にならない程度のかみ型だったと考えられます。また、一般の人は、農作業の邪魔にならないように後ろで一つに結んだり、お団子状にして頭の上に上げたり

していました。

古墳島田のしぼり方は、まずかみを後頭部でひとつに束ねて、毛先を内側に折り返します。次に、まげの中ほどをひもでしぼって固定します。美豆良や島田まげの実馬矢をした人の話によると、70cm以上のかみが必要だったそうです。そう考えると、高貴な人は、かみが長かったことが分かります。

古墳島田の再現



← 実際祭に作ってみました。

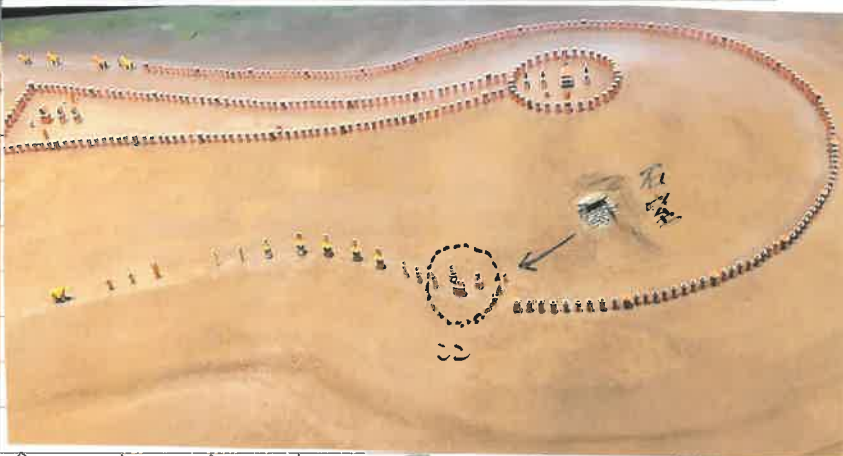
実際に作ってみると、上でひとつにまとめることが難しく、すずしいことが分かりました。また、かみの毛の量によって、まげの大きさが変わることも分かりました。

② 背中の丸い物は何かということについて



三人童女の背中の丸い物は、鏡です。鏡は魔除けとして使われ、邪悪な物を退けるとされていました。また、神をまつる神祭りや葬祭にも使われてきました。

弥生時代前期に中国大陸から鏡は伝わってきました。鏡を見た、当時の日本人からすると、光を反射し、姿を映す鏡にとっても神秘的な力を感じたと考えられます。



↑三人童女は、石室から見て、北西の方角に配置されました。

③ 手の形は何かということについて



三人童女の手は、体の前で手を合わせ楽器のげんのようなものを持っている形だと考えられています。わきからうでの外側を通り、手首のあたりまで「にげん」が付いています。このげんは何かという、うでの角度によってげんを張り、親指でげんを鳴らす「鳴げん」の呪休をするためだと考えられています。これは、音を出していいや祖先、神を招く呪休です。奈良・平安時代に、竹ぼうで「弓のげん」をたたいて、その音で「神やれい」を呼びよせてその言葉を伝えるあずさみこがいました。これも鳴げんの呪休と似ています。

げんが付いていて、音をかなてる埴輪は、男性埴輪のみだったので、女性で「げん」をひく埴輪は、これが「唯一」です。げんをひくためには、左右のげんが一本につながっていないとひけないので、左右の手の上にげんがなかった

ことに疑問を感じ、博物館の人にきいてみました。すると、当時は1本のげんで表現されていて、それが取れてしまったのか、左右の手の上にはもともとなかったのかは、分からないそうです。私は、実物を見て、手首の上のげんの先端部分が折れて取れたように見えました。当時はつながっていたものが、古墳の墳丘に長い間置かれたことで折れてしまったのではないかと思います。

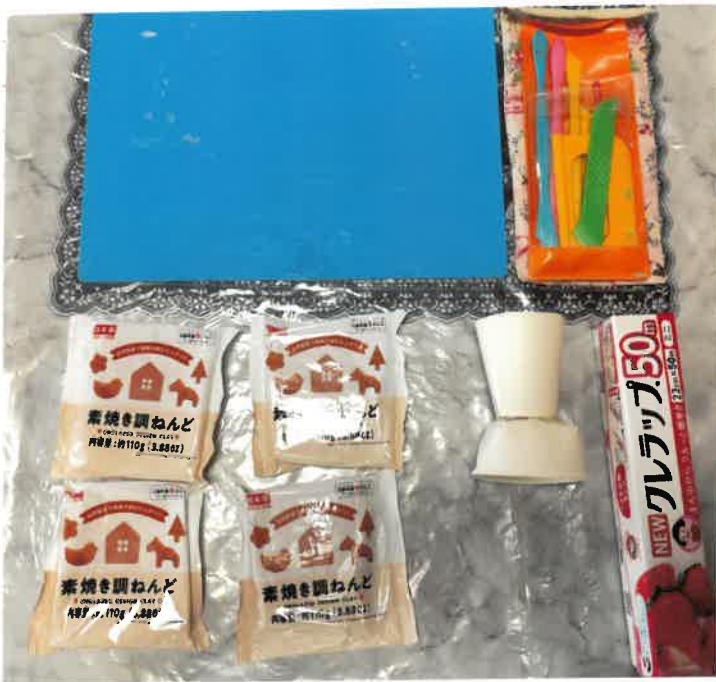


←三人童女のCG画像
わきからうでの外側を通り、うでのあたりまで「げん」が付いていることが分かります。



↑三人童女の演そう推定CG

(2-(3)) (2)の結果をもとに、自分で実際に作ってみる。
〈用意する物〉



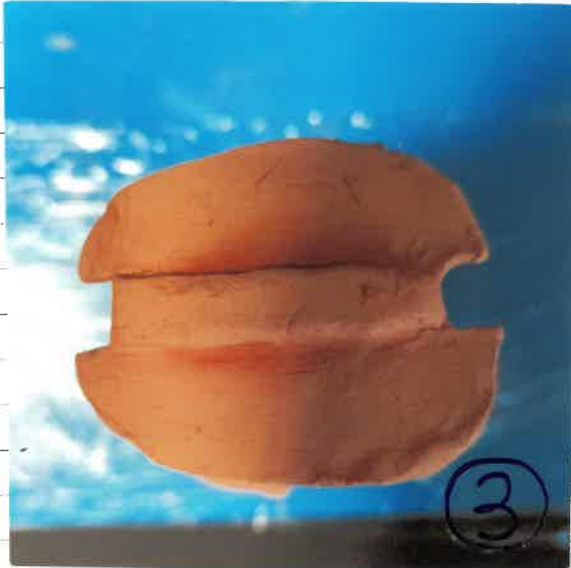
・ねんど板
・ねんどベラ
・素焼き調ねんど
・自分で作った三人童女の型
(紙コップを2個使って作りました。)
・ラップ
・水 (ねんどが固くなった時に使います。)

三人童女は、親指でげんをはじいて演そうしていたといわれています。実際の三人童女は、左右の手の上にげんがつながっていないけど、演そうができるようにげんをつなげて作ってみようと考えました。

<作っている様子>



〈①、②〉体の型の紙コップにねんどをはり、頭をつけました。顔に目と鼻と口をつけた時、人らしくなり、わくわくしました。



〈③〉かみのもてです。まっすぐ頭のの上にのせるのが難しかったです。

〈④〉手をつけました。落ちないようにつけるのが大変でした。指は、自分の手を見ながら作りました。





⑤



⑥



⑦

〈⑤、⑥、⑦〉人間らしい肉づきにするため、肩からうでにかけて丸みを付けました。服のデザインもつけてあります。背中に鏡があります。わきから、うでを通り、手の上にけんをつけました。



⑧

〈⑧〉実際に親指でけんをはしく形をイメージして作りました。



⑨

〈⑨〉台をつけました。完成です。

〈作ってみた感想〉

私は最初に埴輪を見た時に、細かい所まで再現できていてすごいなとここまでひとつひとつの部分をしつくりと見て、考えていませんでした。でも、作ってみて細長くのはしたり、体の形をなだらかに整えたり、小さいパーツを取れないようについたりたくさんの難しさを知れました。それから、埴輪を見て、体の形が本物の体のように整えられていてすごいな、身につけているアクセサリーを埴輪につける時は、落ちてしまったり、折れてしまったりして大変だったのかなと埴輪を作っている場面を想像したり、すごいなと思った所を深く考えたりするようになりました。

三人童女を作った難しかったことは、親指やひし、げんや耳と耳かざりを作ったことです。親指を内側に向けて付ける時は、すぐに折れてしまい、付け直しをたくさんしました。ひしをまげている所を再現する時は、ひしをまげようとするとすぐにヒビが入ってしまい、何度も修復をしたり、ねんどをつけ足したりしました。耳と耳かざりの時も同様に苦戦しました。げんを作っている時に、ねんどをのばすとちぎれてしまったことが難しかったです。でも、だんだんと作っていくうちに、のばすことがうまくなりました。とてもうれしかったです。

たくさんの難しい思いをして作った自分の三人童女に、私の気持ちがこめられていくことを自分でも実感しました。1体だけを作ることも難しい三人童女を作った人は、とてもすごいなと思いました。それに、実際の三人童女は、もっと大きいので、より作ることは大変だったと思います。実際に作って、埴輪作りの大変さを知れて良かったと思います。

4.まとめ・感想

観音山古墳の被葬者は、ヤマト政権との関わりだけでなく、今の中国や朝鮮半島と交流をして、昔の日本の外交政策に関わっていたことが分かりました。群馬にある大きな古墳、そこにおさめられた副葬品、古墳の上に配置された埴輪たち。それは、当時の権力や富の象徴であり、日本の中心地の一つであることが分かります。これからもテーマを変えて、たくさん調べていきたいです。

今回、観音山古墳や博物館に連れていってくれた西親、石室の中を見せてくれた観音山古墳の管理人さん、貴重な話をしてくれた学芸員さんに感謝の気持ちでいっぱいです。とても大きい古墳、埴輪をつけた昔の人たちに尊敬の気持ちができました。

5.参考文献

- ・ 堀田 亜紀子: 知られざる古墳ライフ (株) 誠文堂新光社, 2021
- ・ 河野 正訓: 調べる学習百科 古墳のなぞがわかる本 (株) 岩崎書店, 2019
- ・ 石島 和天, 若狭 徹: 群馬県公式はにわガイドブック HAN1-本 群馬県, 2009
- ・ 東国文化ガイドブック くま東国文化ものがたり, 群馬県, 2019
- ・ 若狭 徹 他: 楽しく学べる歴史図鑑 はにわ (株) スタジオタッククリエイティブ, 2021
- ・ <https://www.kokugakuin.ac.jp/article/150631>
- ・ 群馬県高崎市 綿貫観音山古墳パンフレット, 群馬県立歴史博物館